

ある「休み」と定められた土曜日のことです。イエス様が麦畑を通ることがありました。イエス様のお弟子さんたちが、麦の穂を手で摘んで、その実を手で揉んで殻を外し、食べました。そこで何人かの「ファリサイ（分離）派」と呼ばれる人々が言いました。「今日は『休み』と定められている。『今日してはいけないこと』を、あなたたちはしている。どうしてそんなことをするのか。」

イエス様は答えてこう言いました。「あの英雄ダビデがしたこととして、旧約聖書に書いてあることを知らないのですか。——ダビデとそのお付きの人々が空腹だった時、彼は神の家に入り、そこにあったパンを食べ、お付きの者にも与えた。それは『してはいけないこと』であった。それはただ、祭司だけが食べてよいものであった。」

そしてイエス様はこう言ったのでした。「休みの日の主（あるじ）はだれか。誰のために、休みの日はあるのか。『人の子』と呼ばれる者、つまり私のために・おなかをすかせた人のために、休みの日はあるのだ。」

また別の「休み」と定められた土曜日のことです。イエス様が公民館に入ることがありあした。イエス様は大人の学習会に参加している人々の中に入って、いろいろな事を教えていますと、そこに一人の人がいました。その人の右の手は萎（しな）びていました。その時、そこに、イエス様をじっと見つめる目がありました。「ファリサイ（分離）派」と呼ばれる人々と「律法学者」と呼ばれる人々の目でした。今日は「休み」と定められた日です。そうして、ローマ帝国にみんなで立ち向かう、大切な日です。「スト破り」をして病人を癒すのではないかと、イエス様を監視する目が、そこにあったのでした。「ここでイエス様を告発してやろう」と無言のうちに話し合う声を、はっきりと聞き取った上で、イエス様は右手が萎えている人に向かって言いました。「さあ、立ち上がりなさい。そして、みんなの真ん中に立つのです。」

そしてイエス様は、自分を厳しく見つめている人々に向かって、このように尋ねて言いました。「ひとつ、伺いたい。『休みの日』と定められた日に許されているのは、良いことをすることか。それとも、悪いことをすることか。助けることか。それとも、めちゃくちゃにすることか。」

イエス様を見つめていた厳しい目を、一つずつ、イエス様は見詰めながら、イエス様は手の萎えた人に言いました。「あなたの手を伸ばしてごらんなさい。」

すると、その人の手は伸びたのです。すっかり、元通りになっていました。それを見ていた人々は、すっかり、何が何だか分からないような思いに包まれてしまいました。そして、互いに「これは大変なことだ。」「こんなことをされて・・・」「放ってはおけない。」「何とかしなければ」と、口々に語り合い始めたのでした。

そうしたことがあった後の日のことです。イエス様は山に登って行かれました。祈るためです。神さまに、夜通し、イエス様は祈りました。そして朝になったので、イエス様はお弟子さんたちを呼びよせました。そして、その中から 12 名を選びました。その 12 名に「使徒」という名前を、イエス様はお付けになりました。

その 12 名は次の通りです。まず、「ペテロ」とも呼ばれたシモン。その兄弟のアンドレ。それから、ヤコブとヨハネ。そして、フィリポとバルトロマイ。マタイとトマス。アルパヨの子であるヤコブ。「熱心党」と呼ばれたシモン。ヤコブの子であるユダ。そして、カリオテ村のユダ——彼こそが「引き渡した人」と呼ばれた裏切り者となります。

そして、お弟子さんたちと一緒にイエス様は山から降り、平地に足を付けて立ちました。そこには大勢のお弟子さんたちがおり、また、ものすごい人数の人々がいました。その人々は、首都圏であるユダヤ地方の全土から、とりわけ首都であるエルサレムからやって来ていました。また、海沿いのギリシア都市国家であるティルスとシドンからも、やって来ていました。その人々は、あるいはイエス様の話を聞くために、また、病気を治してもらうために、来ていました。そこには穢れた霊に振り回されて、周囲に流され有象無象の大衆となってしまうていた人々がいたのです。そして、その人々は癒されて行きました。この大衆化された人々・右も左も弁えなくなっている有象無象の群衆は、何とかしてイエス様に触ろうとしました。と言うのも、イエスさまからは不思議な力が流れ出て、人々をさっぱりと綺麗に癒していったからです。(どうぞ、この様子に、教会の姿を重ねてイメージしてください)

イエス様はその群衆の苦しい低みから目を上げて、お弟子さんたちを見つめました。そして、こう語り始めたのでした。

「幸せ者だ。貧しい人々は。

神さまが取り切ってくださいる国は、あなたたちのものだ！

幸せ者だ。今、おなかをすかせて苦勞している人々は。

おなか一杯になるぞ！

幸せ者だ。悲嘆にくれて涙を流すあなたたちは。

きっと、笑顔でいっぱいになるぞ！

幸せ者だ。嫌われ、憎まれているあなたたちは。

差別され、いつも責められている人々は。

幸せ者だ。『人の子』である私のために『悪人』とされ、

のけ者にされるあなたたちは。
そんな時には、喜ぶのだ！
飛び跳ねて喜べ！
いいか、よく見て見ろ。天での報いは大きいぞ！
あの連中は、代々、まさにそのように、
預言者たちにしてきたのだから。」

「さて、呪われているのは、富んでいるあなたたちだ。
もうすでに、必要を満たされてしまっている。

呪われているのは、おなか一杯になっているあなたたちだ。
もうすぐ、あなたたちは空腹になる。

呪われているのは、今、笑っているあなたたちだ。
もうすぐ、後悔の痛みに呻き、泣きわめくことになる。

呪われているのは、みんなに褒められているあなたたちだ。
あの連中は、代々、まさにそのように、
偽預言者たちにしてきたのだから！」

「だが、今、私の声を聴いている人たちに、私は言うておく。
あなたたちの敵を大切にして、大盤振る舞いしてやれ。
あなたたちを憎む人々には、美しく親切なことをしてやれ。
あなたたちを呪ってくる人々を、祝福してやるのだ。

悪意を持って向かってくる人のために、
神さまへのとりなしの祈りをささげてやれ。
頬をひっぱたく人がいたら、反対の頬を向けてやれ。

上着を奪おうとする人に行き当たった時は
下着も奪おうとするだろうから、その通りさせてやれ。
求める者には与えてしまえ。誰にでも、そうするのだ。

あなたたちが持っている物を欲しがる人がいたら
返してもらえるかどうかなど忘れて、渡してしまえ。

誰かに対して、
『あいつらは、こうすべきだ』と思うことがあるなら
その通り、その『誰か』にしてやるんだ。」

「なあに。あなたたちを大切にしてくれる人を
あなたたちが大切にしたところで、
そこからどんな御利益が得られるものでもないだろう？
神さまからの御利益からまったく外れているはずの
あの頓珍漢な大馬鹿者でも、
自分を大切にしてくれる人は、大切にしているじゃないか。

あなたたちにとって都合の良いことをしてくれる人たちには
その人たちの都合を考えてあげるだろう。もしそうだととしても
そこからどんな御利益が得られるものでもないだろう？
あの頓珍漢な大馬鹿者でも、同じことをしているじゃないか。

『この人だったら返してくれるだろう』と期待できる人たちに
何かを貸し与えたところで、
そこからどんな御利益が得られるものでもないだろう？
あの頓珍漢な大馬鹿者でも、同じ頓珍漢仲間に、
『こいつだったら返してくれる』と期待して、
何かを貸し与えたりしているぞ。」

「いいか、仇敵（きゅうてき）を、大事にするんだ。
敵の都合のいいことをしてやれ。
『どうせ、あいつは』という絶望を捨てろ。
いいから、貸してやれ。
そうしたら、あなたたちは大きな報いを得る。
『いと高き方』の子どもになれるぞ。

いいか、『いと高き方』は、
誰の利益にもならない碌でなしに対しても、
悪人に対しても、
実に優しく親切で太っ腹なお方だ。

あなたたちは、とにかく、情け深くしなさい。
それはつまり、
あなたたちの父上が情け深くしてくださる、
その通り、あなたたちも、しなければならないということだ。」